

白山ふるさと文学賞

第二回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生高学年小説の部 最優秀賞

## 親友と私の十カ月思い出

広陽小学校五年

木下 遥夏

受賞の言葉

この作品で、親友との絆を感じてほしい  
と思います。また、自分と重ねて書いた所  
もあるのです、この気持ちを分かってもらえ  
たらいいなとも思います。賞をもらった時  
は、うれしさとおどろきでいっぱいになり  
ました。

私は、有名人の通訳をしている。日々仕事にはげんでいる、まじめな二十六歳。今でもふと思いつき出すことがある。それは、十五年前の出来事。私は、小学五年生だった。

その当時の私は、真面目だったが、良い子を演じていた。小学校に入學してからの五年間、ずうっと、私は、良い子だった。そんな自分に満足していた反面、本当の自分を出したいという思いも持っていた。はつきり言つて私は頭が良かった。成績もずばぬけて良かった。だから、「宿題教えて。ここ分らないんだあ。」

と聞いてくる子が多かった。なんの努力もしないで。ズルイ。でも良い子なので、ことわれなかった。五年生になつてから一週間がたった。私は、一人の女の子を気にかけていた。いつも誰ともしやべらずに静かに周りの様子をほほえんで見ている子。私は、声をかけた。

「一緒に話そうよ。」  
するとその子は、

「うん。」

と満面の笑みを見せて答えた。私たちは毎日いろいろなことを話した。いつの間にか、その子は、クラスの子たちとも、打ち解けていった。ある日の帰り道、その子が突然言った。

「良い子でいるのつらくないの。」

私の心臓は、ドクツとなった。いつもは、ごまかす私だったが、なぜか、その子には、話したくなかった。

「つらいよ。でも、傷つくのがいやだし、きらわれて友達が減っていくのが、こわいから。」

その子は、やさしい目で見つめていた。私は続けた。

「でも、こんなこと話したいと思つたのは、あんただけだよ。」

私は、泣きながら言つた。すると、

「ありがとう、話してくれて。もし良かったら、親友にならない。私、あなたとなら、何でも話せて、何でも受け止められそう。」

私もまったく同じ気持ちだった。それからは、放課後も二人で遊ぶようになっていった。

夏休みになった。二人で、ほぼ毎日遊んだ。でも、ある日、

「何して遊ぶ。」

と聞いてきたから私は、

「おにごっこがいいな。」

と言つた。すると、

「おにごっこかあ。」

とその子は、少し、なやんだような、さびしそうな表情になった。

「どうしたの。」

「ううん。なんでもない。」

そして、

「そうだね、おにごっこしよう。」

と言つた。こうして夏休みが過ぎ、二学期になった。私は、その子を心配していた。夏休み中、走るとすぐに息切れするし、いつもつかれていた。二学期の最後の方には、体育の授業さえも休むようになった。声をかけると、

「大丈夫。」

と無理やり笑顔を作っていた。十二月、その子に話しかけた。

「冬休みどうする。」

その子は少しだまってから、

「ごめんなさい。冬休みは、ずっとお母さんの実家に帰るの。」

「そう。じゃあまた三学期だね。」

そう言つと、

「うん。」

とうなずき、その子は、今まで見せたことのない笑顔で笑つた。

三学期になり、始業式が始まつた。その子の姿は見えなかった。家に帰ると、お母さんが、

「出かけるから、準備しなさい。」

と静かに言った。私はこわくなった。行き先は病院だった。病室には、静かにねむる。その子がいた、

「どういふこと。」

その子のお母さんが、

「この子は。死んじゃったの。」

と悲しそうに言った。つくえの上には、手紙があった。

「親友になってくれてありがとう。」

と書いてあった。私は、泣いた。後から後から涙が流れてくる。その子のお母さんは、

「この子、五年生になってから、病気が悪くなり始めたのに、どんどん元気になって、夏休みも先生の反対をおし切って、体を動かしいつも汗だくだった。よっぽど楽しかったんだと思う。でも冬休みとうとう入院することになって……。あなたに言わないでって口止めされていたの。」

「じゃあ私のせいだ。」

「えっ」

「私が、無理におにごっこをしたり、いつも遊んでたから。」

と自分を責めた。でもその子のお母さんは、やさしくあなたのせいじゃないと言ってくれた。その子は、クリスマスプレゼントに、おそろいのキーホルダーを買ってくれていた。その子は最後まで私のことを思ってくれていたのだ。

その子がいなければ、私はいつも通り良い子を演じていた。そして、夏休みは何もなく過ぎていっただろう。でも、夏休みは楽しかった。良い子を演じなくても、本気でぶつありあえる友達がいや親友ができた。その子のおかげで、私は変わった。その子との思い出は、十月。数字では短く感じるが、私には、宝物の十月月だった。その子のことは、絶対忘れない。私の心の中で生き続けている。私とその子の十月月の思い出は、人生で一番の宝物になるだろう。いつまでも、親友だからね。

